

大学教授職の国際比較研究における専門分野の視点

有 本 章

目 次

- 1 大学教授職の性格の曖昧性
- 2 国際比較の枠組みと視点
 - 1) B. クラークの分析枠組み
 - 2) 専門分野と研究の論理
- 3 専門分野の視点
 - 1) 専門分野の大学への制度化
 - 2) 大学変動の専門分野への影響
- 4 専門分野と大学教授職の関係
 - 1) 専門分野と仕事
 - 2) 専門分野の文化とアカデミック・ライフ
 - 3) 専門分野の成層
 - 4) アカデミック・ドリフト
- 5 結論

大学教授職の国際比較研究における専門分野の視点

有本 章*

1 大学教授職の性格の曖昧性

大学教授職の国際比較においては、①大学教授職の定義、②法的特質、③制度的組織的構造、④大学教授職の形成過程、⑤キャリアの構造と実態、⑥社会的機能と役割、⑦大学教授市場、などさまざまな角度からの研究が必要と考えられる。筆者は、これらの角度から若干の研究に携わってきた。特に、⑥の大学教授職の社会的機能と役割の中で、研究と教育の側面に重点をおき、とりわけ研究における諸問題を扱い、「学問的生産性」(academic productivity)に関する基礎的研究を行ってきた¹⁾。しかしわが国ではこの領域における系統的な研究は十分なされているとはいえない。まず「大学教授職」という概念自体、その定義や内容が必ずしも十分に検討されているとはいえない実情にあるし、また、大学教授職に関する国際比較を行う場合の分析枠組みも明確になされているとはいえない²⁾。さらに学問的生産性に焦点を当てても、その基礎をなす「専門分野」(academic discipline)の視点からの研究は系統的になされているとはいえない実情にある。

そこで小論では、これらの問題を踏まえ、大学教授職の国際比較の枠組みを考える視座から、専門分野の視点に注目し、学問的生産性の発展を条件づける構造と特質をアメリカの大学と大学教授職の発展に位置づけて考察してみたい。

国際比較の枠組みを考える場合、上記①ともかかわって、大学教授職の定義をしておく必要があるが、実際には大学教授職は、語義的と性格的と二重の意味で曖昧な概念であるといえるのであって、むしろ曖昧性を認めるところから考察を出発せざるを得ない。もとより大学教授職という用語は academic profession という原語の邦訳である。この言葉は邦訳としてしばしば使用される割には、使い方自体未だ定着しているとはいえず、大学教授職と漢字表記したり、アカデミック・プロフェッションとカタカナ表記したり、まちまちの使用方法が認められるのであり、用語的にはいずれは統一しなければならないという課題を担っている。外国の文献ではあまり定義も加えられずに無造作に使用されているにもかかわらず、訳語として使う場合に抵抗があるのは、文化や風土の違いをその言葉に刻印しているからにほかならないと考えられよう³⁾。

また、性格的曖昧性について言えば、わが国ではもとより、高等教育研究が進み、研究蓄積が進んでいると思われるアメリカにおいても、系統的研究によって十分に明確化されているのではなく、期待したほど十分な成果はあがっていない、という評価が行われている。クラーク (Burton R. Clark) が「1980年代中葉にあっても殆ど何も分かっていない⁴⁾」と指摘するごとく、アメリカにおいても、諸外国においても大学教授職についてあまり多く知られている実情にあるようには思えな

*広島大学・大学教育研究センター教授

い。したがって、大学教授職というものの性格、特質、定義においても必ずしも明確にされているといえるのではなく、未だ曖昧なままになっているといわなければならないのである。例えば、ハルゼー＝トロウ（A. H. Halsey and Martin Trow）のごとく大学教授職は単一の専門職であるとする観点に立つ解釈もみられるが、⁵⁾リアルに観察すれば、単一の専門職像は描けそうにない。なぜならばクラークが別々の書物で述べている表現を引用すれば、次のような複雑な様相を現わしているからである。

「大学教授職はおかしな職業（an odd occupation）であることは疑うべくもない。多くの専門分野から成立し、専攻のアルファベットからいえば、人類学と天文学から西洋文明と動物学にまで延びており、すべての自然科学、人文科学、そして多くの芸術を包括している。また、他の専門職のための養成所としても作用していて、その成員は医師、弁護士、建築家、技師、そして他の上級職人の代表を含む。言ってみれば、多様性が特色である。つまり、利害の集塊状（conglomerate）が欠かせないのであって、そこでは目的と業務は主題、顧客、職業の結びつきの線に沿って、着実に分割されている。そして不明確さがそのスタイルである。⁶⁾」

「大学教授職は諸専門職の中では風変りなもの（oddity）である。西洋の約8世紀間というもの、医学と法学のごとき他の指導的専門職のメンバーを養成してきた。最近では、養成と正当化を求めてやってきた多くの自称専門職を収容した。他の職業群が大学教授職の中に居を構え、彼らの習慣や利害を大学教授職の一部と化し、大学内に彼らを代表する専門職大学院や学部を統制しないまでも形成する。この抱き込みだけでも、医学、法学、建築学、工学から成り立つユニークな連邦としての専門職を保証し、学校教育のような巨大な伝統的領域とかコンピューター科学のような新たな専攻を合併するのである。そして職業領域の混合は無限抱擁のほんの始まりにすぎない。この専門職は、主として大学システム自体に基礎を置き、学問的利害のアルファベット順を辿れば、考古学から動物学へと伸長し、自然科学及び社会科学、人文科学のほとんどの領域、さらには芸術のあるものにまで及んでいる多くの専門分野に根ざしている。...」⁷⁾

これらの表現に見られるように、少なくとも大学教授職は、他の専門職従事者を養成する専門職であり、これは、パーキン（Harold Perkin）によって、キー・プロフェッションと呼ばれている側面を表わしている。⁸⁾しかし、それにとどまらず種々の専門分野から成り立ち、無数の職業領域にまたがる無限抱擁的性格を持ち、分割された利害の寄せ集めから成り立つコングロマリットであり、風変わりであり、しかも不明確である、というべき性格を持つのである。大学教授職の世界は、単一で明快な構造を持つよりも、こうした曖昧で不明確で捉えどころのない性格に彩られているところに特徴と秘密が隠されていると考えるべきなのである。

確かに、法的規則が存在するのをはじめ、教育、研究、管理運営、社会サービスにおいてその社会的機能や役割が発揮され、制度や組織があり、大学教授市場やキャリアが歴然と存在していることは推察できるけれども、個々の具体的な実態になると何もよく分からない。一国の中においてもそうであるが、ましてや国際的な広がりの中で考察するとき、十分な理解は得られないように思われる。アメリカの大学教授と日本の大学教授がどの様な相違を持っているのか、イギリスの大学教授との違いは何か、またドイツとはどのようになるのか、と質問してみれば、必ずしも十分な解答

を得られないことが判明するのである。もちろん、このような曖昧性を認めそれを助長するような定義をいくらしてみても大学教授職については何も分からないのも同然であり、生産的でない。そこで大学教授職についてもう少し系統的に研究してみることによって、曖昧性を除去する作業を行うべきであろう。

2 国際比較の枠組みと視点

大学教授職は曖昧で不明確であるとしても、抽象的、観念的、普遍的、規範的、アприオリ的なものではなく、現実の社会的制度や集団のなかで規定されながら個々の大学人が構築している専門職であるから、こうした制度、集団を反映した個々の専門職固有の性格や特質がそこに具現していると考えられる。けだし社会的存在であり社会的実体がある以上、社会的、構造的になんらかの形でその性格を規定することはできるはずであり、問題はそれを捉えようとする有効な物差しのあり方の有無であろう。物差しのあてがい方によって、恐らくさまざまな大学教授職像がほのみえてくるはずであり、少なくとも、大学教授職が成立し、発展するには具体的な過程が存在することがほのみえてくるはずであると考えられる。そこにはドイツ的、イギリス的、フランス的、アメリカ的、日本的などの個性が現われるはずである。

1) B. クラークの分析枠組み

そこで、大学教授職研究の物差し、つまり枠組みを考えてみなければならない。国際比較研究の枠組みの必要性を考える場合に、すでに行われている若干の国際比較研究を踏まえながら枠組みを整理し、また基本的な視点を明確にする作業を欠かせないといえるだろう。その点、筆者はクラークの理論と実証研究が数少ない先行研究の中でも重要性の高い先行研究の一つであると考えている。なぜならば、彼の研究は、①国際比較研究の希少研究モデルを提供していること、②理論と経験の両面から研究成果を集積して実績を上げていること、③広く高等教育システム研究に位置づけた視座から大学教授職の研究モデルを提供していること、④大学教授職を構造機能主義的に分析しながらも、パーソンズ・モデル⁹⁾のごとく抽象的に捉える視点をとらず、できるだけさまざまな文脈に沿って「内部主義者の視点」(internalist perspective)によって把握しようとし、しかもなおかつ「システム」(system)の視点との統合を行う試みを維持していること、⑤高等教育の社会学と科学社会学の連携の可能性を示唆していること、などにおいて成果を上げていると考えられるからである。したがって、ここでは彼の所論のなかから基本的枠組みを抽出し、それを手がかりに考察してみたい。

クラークの枠組みは、①国家的文脈 (national context)、②専門分野ないし研究領域 (discipline or field of study)、③機関 (institutions)、という3視点から構成されている¹⁰⁾。

第1の大学教授職の国家的文脈の視点は文字どおり国際比較の観点である。国別に大学教授職の生成発展の経緯が異なり、固有の特質に彩られている点を、個々の文脈に位置づけながら具体的にみる視点をこれは指している。大学教授職に類似性や相違性があるか否かは、国別の大学教授職の生成発展の状態を突き合せ比較しながら照合させる作業が必要である。第2の専門分野の視点は、専門分野間比較の観点であって、それは専門分野によって大学教授職の形状が異なると仮定する。

個々の専門分野における性格を明らかにすることによって、大学教授職の類似性と相違性が実証的に解明されると考えるのである。第3の機関の視点は、例えばフランスのグラン・ゼコールと大学、アメリカの研究大学とコミュニティ・カレッジといった機関的類型比較の観点である。

三つの視点は第2と第3の視点を軸にして第1の視点が構成される仕組みである。すなわち、一国の大学教授職と言っても一枚岩の形状を捉えることは困難である以上、個々の専門分野と機関とさらには個々の大学人という三者の織りなす具体的な相互作用の中で一つの形状は形づくられると考えられる。一国に限定してすら三者の相互作用過程は複雑な様相を呈するため、諸国家の実体はさらに複雑きわまりないものになってしまうことは必至である。こうした困難さが予想されるとはいえ、できるだけ個々の実情を知り、具体的事実を積み重ねる作業は欠かせず、抽象的なイメージを描くのではなく、これらの各側面を観察する作業がまず必要である、といえるだろう。

これらの関係は、しかしながら、口で言うほど簡単であるのではなく、複雑に入り組んだメカニズムを持っていると予想されるのであり、したがって時間をかけた考察を欠かせない。小論ではひとまず範囲を限定して、これらの中で、高等教育を成立させ、教育と研究という仕事を規定し、大学教授職を成立させる最も基本的要因になっており、とりわけ研究と関わって学問的生産性を考える原点をなしていると考えられる、専門分野の視点に焦点づけてみたいと思う。

この視点に限定し、専門分野の視点から見るとしても、他の視点を全く等閑に付すのではない。オルソンとヴォス（Alexandra Oleson and John Voss）が「知識の組織」を研究する作業において指摘したように、基本的には専門分野の基礎を形成する知識が単独に発展するのではなく、発展プロセスには個々の大学教授、個々の機関が関係して来ることは当然の成りゆきであるため、大なり小なり三者の関係の中で考察がなされる必要があることはいうまでもない。¹¹

さらに、専門分野の視点から大学教授職を問題にすれば、上述したように、各国の大学教授職類型が描かれるとしても、同じ国のさまざまな専門分野に携わる大学教授職によって、異なった世界が分化していることが分かってくる。専門分野間の相違、その中の専攻領域の相違からは、見かけは同じように見える大学教授職の世界に繰り広げられる個々別々のアカデミック・ライフが見えて来るはずである。クラーク風に言えば、「小さな世界」（small worlds）でありながら、「さまざまに異なった世界」（different worlds）にアプローチする枠組みと視点がそこに存在するはずである。¹²

2) 専門分野と研究の論理

さらに、専門分野と大学教授職を問題にすることは、専門分野の持つ知識の分化（differentiation）と文化（culture）という固有の性質から類推して、必然的に科学（science）と研究（research）の問題を扱うことになる。もう一つの重要な枠組みである「機関」の視点がどちらかといえば、教育（teaching）の問題を扱うことになるのであれば、科学の社会への制度化、大学への制度化、そして大学教授職の成立を考える視点は、この専門分野との関係を見無視しては成立しない。したがって、その点を強調するならば、専門分野へのコミットメントによる大学教授職の成立は科学研究とかわかって、次のようなさまざまな側面を持つと考えられる。¹³

①従来の教育中心から研究中心の価値規範が大学に制度化され、教育の内容も古典、人文、リベラル・アーツを主体とした教養教育は専門教育や実用教育へと移行する。②大学の基本的運営単位

として「学科」(department)が制度化され、学科の中に専門分野が制度化される。③それと対応して、新興の自然科学中心の専門分野志向と伝統的人文科学系主体の教養志向の対立葛藤が深まる。対立葛藤を経由しつつ、人類の遺産や文化を伝達する、なんでも教える教師から個々の専門分野を研究し専攻領域の知識の生産活動を行う科学者、研究者の価値が高まり、大学人は教師から研究者へと移行する。大学教授の世界に複数の専門職の世界が叢生する。④科学のエトスが大学に制度化されるとともに、大学人は科学のエトスを内面化し、それにしがった行動をとるようになる。⑤研究者のキャリアが出現し、Ph. D.に典型的にみられる形で後継者の専門職的養成が行われ、大学教授職への新人のリクルートが研究を中心に行われるようになる。(例えば日本では「お雇い外国人」教員から国産教員への移行、アメリカでは「ドイツ帰り」教員からジョンズ・ホプキンス型の国産教員への移行、にそのような動向がみられる。)⑥専門分野ごとの専門学会や協会が設立され、学会誌が発行されるようになる。専門家と素人の区別が次第に明確につけられるようになる。⑦研究重視の制度としてサバティカル・イヤーズつまり「研究休暇」が導入される。⑧大学教員の中に職階制が導入される。また、テニユア制が導入される。そして、上級ポストへの任用、昇任にあたって、独創的研究、パブリケーション、学会活動、学問的生産性による社会的可視性など研究能力が重視されるようになる。⑨専門分野の学会とも関係するが、科学者の研究網が公式に確立されるとともに、非公式に有力な科学者を核にした「見えざる大学」(invisible college)の¹⁰リサーチ・ネットワークができあがり、学者の内部に「持てる者」と「持たざる者」の格差が増大する。いわゆるマタイ効果(Matthew effect)¹¹が作用する。それと同時に、エリート科学者を集積した科学の中心地が形成される。⑩科学研究活動を評価するためのピア・レビューを中心にしたレフェリー・システム、さらには大学や大学教員の質評価システムが発達する¹²。

これらの側面は、科学知識、上級知識としての専門分野の性質が備えている普遍的性質からすれば、世界の高等教育システムにおいて早晚経過する必然性をもっているようにも考えられるが、個々のシステムの個性によって個々の展開がなされるから、一様の展開がなされるのではない。その点、この種の動向を最も典型的に示すことになったのは、アメリカの高等教育システムであり、またアメリカの大学教授職であるといえるだろう。したがって、アメリカの発展の動向はこの種の専門分野の視点を中心に大学教授職を比較考察する場合に、一つの基本的モデルを提供するとみてさしつかえあるまい。

いま指摘したことは小論の他の問題意識である、なぜアメリカを中心に標記の主題を考察するのかという点にかかわる問題である。補足説明を加えるならば、次のような点が考えられる。①アメリカの高等教育システム、なかんずく大学システムは今世紀に入って世界の学問研究のセンターとしての役割を担い、研究と教育のいずれの機能においても、今や世界で最強の能力を誇っている、といっても過言ではない。そのようなシステムは一つのモデルとして注目に値する。②産業社会の大衆化、民主化、情報化、国際社会化、学習社会化、消費者主義、学生のニーズの多様化などに柔軟に対応した、大衆高等教育の時代に適した高等教育システムを構成している。したがって、こうしたシステムを動かす大学教授職には、システムの特質が如実に反映され、同時に大学教授職の特質がシステムに反映されているはずである。③卓越した高等教育を支えるのは、物、施設、資金な

ど物質的要因であることも否定できないが、物や組織を動かす原動力はそれ以上にヒトであり、精神であると考えられるから、大学教授職の力量と活力に負うところが大きいと考えられる。④大学教授職の技術が研究と教育であるとすれば、アメリカの大学教授職を卓越したものにしているのは、他ならぬ研究と教育の技術であり、その基底には研究と教育の「素材」(materials)である知識＝専門分野の存在があるのであり、したがってそこから考察を出発するのは重要であるといえるだろう。科学社会学と高等教育の社会学、とりわけアカデミック・プロフェッションの社会学の学際的領域である点で、以上の部分のいくつかについてはすでに先行研究によって明らかにされているが、それらに欠如している「知識素材」(knowledge materials)に着目して専門分野の視点からアメリカの大学教授職の卓越性を探ることを試みてみる必要がある。

3 専門分野の視点

ベッカー (Tony Becher) が指摘するごとく、専門分野は大学教授職における成員資格と同一視を問うための主要単位であり、大学教授職との関わりは実に大きい¹⁸。専門分野は現代の高等教育を考えるとときにも、機関、大学教授職とともに重要な要素を構成していて、言ってみれば三者は素材、容器、ヒトの側面から高等教育を成り立たせる役割を果たしている。特に大学は知識の生産、伝達、消費とかかわる機関である以上、知識、上級知識、科学的知識、あるいはそれらから組成される専門分野こそは最も基本的な素材であるといってさしつかえあるまい。専門分野なしには大学は成立せず、同様に専門分野なしには大学教授職は成立しない。

「大工がハンマーをもって打つべき釘を探し回るのだとすれば、教授は、一般的であろうと特殊であろうと、知識の束をもってそれを議論すべき方法ないしそれを他者に教えるべき方法を探し回るのである。どんなに広く定義しようと狭く定義しようと、知識は素材である。研究と教育は主要な技術である。」¹⁹

この素材としての知識の上級のもの、つまり「上級知識」(advanced knowledge)²⁰がすなわち専門分野である。このように定義される専門分野は素材としての重要性を持つばかりでなく、それ自体の特質を備えていると考えられる。クラークは上級知識としての専門分野の特質として、①知識の専門領域が巨大化し分業化すること、②知識の専門領域の異質性と自律性が増大すること、③知識が無限の成長発展を行う性格をもつこと、④知識が累積的かつ集約的性格をもつこと、⑤知識の専門領域を中心に仕事が形成され、それを基盤にした教授集団が形成されること、などを指摘している。²¹

こうした専門分野の特質と大学教授職との関係を問うならば、①が中世以来の伝統的リベラル・アーツと過去二世紀間に分化した専門領域の問題であり、現代における教養教育と専門教育の角逐の問題にまで尾を引いてくる側面であり、②は専門分野間の壁が厚くなり、相互の意志疎通を欠如する側面を示し、③は未知の知識の開拓を追求する研究機能とかかわる側面であり、④は知識が過去の知的遺産もしくは文化的遺産を踏まえて成立することから、カリキュラムやティーチングの問題にかかわる側面であり、さらに⑤は専攻領域を基軸に大学人集団や組織を編成する側面を、それぞれ示唆していると解されるだろう。

このように見ると、知識の分化、上級知識の形成、そして専門分野の成長と高等教育の発達、ひいては大学教授職の発達の間には密接な相互関係のあることが理解できる。

小論の範囲は、専門分野、研究、大学教授職に考察の焦点があるのであるから、主として③と⑤の側面に注意を払うことになるが、専門分野と大学教授職との関係を直接論じる前に、前段階として専門分野と大学との関係を見、そこから専門職としての大学教授職が成立してくるのを見ておく必要があるだろう。そこには、専門分野が大学に影響を及ぼす側面と、大学が専門分野に影響を及ぼす側面が認められ、アメリカの大学の研究志向を中心とした個性が現われて来るはずである。

1) 専門分野の大学への制度化

専門分野が大学へ影響を及ぼす側面は、実際には直接的ではなく、まず社会への影響を介して行われることになった。つまり専門分野が大学レベルに制度化される前にまず、社会レベルに制度化される側面を見逃せない。アメリカに典型的に生じるのであるが、産業の台頭は、分業化をすすめ、新しい職業を叢生させ、専門職化をすすめ、人材の需要を招来したため、人材養成を担当する機関である高等教育機関は未曾有の学生の増大をみるようになった。また、産業社会は科学主義を組み込んだ社会であるから、知識の爆発を招来するのであり、これは当然ながら、専門分野の台頭を促し、それを大学に組み入れる方向で作用することになる。ほぼ19世紀の後半から20世紀にかけてこの新しい社会変化は、それまで象牙の塔的存在であった伝統的の大学に対して仮借なきインパクトをもたらしたのである。大学が変化すれば当然大学教師は変化せざるを得ず、ライト (Donald Light) が指摘したように、この時点から専門職としての大学教授職が成立して来るのである。²²

この時点は、国際比較の必要な時点であり、いかにして科学が大学に制度化されたかに関して、各国の実情に即して体系的な研究が行われ、それを踏まえた情報が十分に生かされれば、国によって違いがあり、国別特色を形成していることが理解できるといえる。そのためにはまず先進国の比較が必要であるが、この観点からの研究に先鞭をつけ、仏、英、独、米の比較を行ったのは、ベンデービッド (J. Ben-David) である。²³ 彼の研究に立ち入る余裕はここではないけれども、彼も分析したように、特に19世紀には、先進国において専門分野の制度化がすすむことになる。オルソン=ヴォスはその様子を述べている。

「19世紀前半において、科学と学問の拡大、科学的領域における適切な分析的方法の精緻化、研究の発展に必要な新しい施設と資源を求める要求によって、西欧の学術機関に主要な構造的変化をもたらされた。つまり、フランスにおけるグラン・ゼコールの設立、オックスフォードとケンブリッジの改革、近代ドイツ大学の発展である。」²⁰

さて、この時点のアメリカの事例を考察するとき、①社会の性格を反映し、②外国の影響を受け、③アメリカ独自の特徴を形成したことが窺える。先ず第一に社会の性格の反映では、ヨーロッパに比べれば後発国でありながら、新大陸、人種の坩堝、フロンティアの国などと呼称されるように、伝統に束縛されず、進取の気風をみなぎらせた風土を持ち、多様な目的を組み込み、多様性を特色とするアメリカ社会では、こうした社会の多様性が学問の制度と結合して、アメリカ的特質を形成するに至ったことを指摘できる。

第二に外国の影響をみると、最初イギリスの影響がみられる。確かに初期の段階はイギリスの影

響を強く受け、伝統的なエリート中心の教養教育を主体として大学教育、カリキュラム、を構成したのであるから、新しい動きがあったとは言い難い。しかし、産業革命の実質化、新しい学問の台頭、科学の制度化が開始される時代には、各国ともそうした動きに背を向けることはできず、大学への制度化が開始されることになるのであり、その点では人文系を中心に相当の抵抗がみられるものの、アメリカも例外ではなく、特にドイツの動きに触発されて、科学、研究を重視し、専門分野を重視する動きが顕著になる。19世紀中葉まで多くの青年がドイツの大学に留学した。そこでの研究重視の大学文化に触発されたけれども、ドイツとは異なって、同一の機関において学部と大学院を同居させるのではない形で研究と上級教育を結合し、さらに農業、工学、ソーシャル・ワークにおける専門教育を導入した。それはジョンズ・ホプキンス大学の設置、土地交付大学の設置などの動きとなってあらわれている。従来の教養教育を温存しながら、新しい大学院を作って、専門分野を主体とした専門教育を重視する。さらに土地交付大学を拠点にして実学に力点をおく。アメリカの大学の多様性を特色とした構造がこうした動きの中で次第に形成されるのである。

第三にアメリカ独自の特徴を形成した側面を注目する必要がある。小論の主題である専門分野との関係で見れば、その契機はアメリカ社会に台頭した専門職化（professionalization）と専門化（specialization）を志向する社会的圧力を受けとめながら、ハーバード大学において「選択制」（elective system）が導入された時点（1869年）にはじまり、学部段階の大学教育において、個人主義と選択の自由という社会の風土を反映しながらさまざまな専門分野が持ち込まれ、さまざまなカリキュラムが使用されることによって、実用的な性格が付与された時点にある。こうして社会の性格と大学の性格が密接に対応することになる。この部分のアメリカの特質は、オルソン＝ヴォスによれば、「知識それ自体のための発展を目指すという、ドイツの理念を犠牲にすることなしにアメリカの大学改革者達は彼らが実生活（real life）と呼んだものにたいする広範でしかも直接的な関与とそうした目標を結合した。」²⁵のだと述べられている。こうした動きは、やがて社会に役立つ学問を身につけた卒業生によって社会に貢献することに帰結し、社会的効果をあげ、社会的可視性を高めるから、翻って社会からの見返りがなされ、進学率の増大を惹起し、世界に先駆けて高等教育の大衆化時代に突入する原因と地均しになる。

こうしてこの時点において、アメリカでは、①イギリスやドイツなど西欧の文化的、学問的影響を継承しそのモデルを移植したこと、②アメリカ社会の性格を大学に反映し、多様で実学的な方向を組み入れ、専門分野を実学的に多様化させたこと、③大学を学部と大学院に層化し、学部レベルで選択制によって新しい専門分野を導入するとともに、大学院では研究者養成と専門職教育によって、専門分野の開拓に重点を置いたこと、④最初ドイツでの留学や学問的影響を受けたが、やがて独力で学問、科学、研究の水準を高め、後に「学問の中心地」を形成するための基礎を構築したこと、などがこの時点において徐々に特徴としてあらわれてくる。

同じ後発国でも日本の場合は、中山茂の言う「自由選択型」（window shopping mode）²⁶の方法によって、高等教育モデルひいては科学モデルを導入した時期が明治維新以後の時期である。多少の前後はあるものの同様の時期に同様に外国にモデルを求めながら、そして同じように普遍的性格を持つ科学知識及び専門分野を扱いながら、その後の両者の発展は、一方が「学問の中心地」を形

成したのに反し、他方は依然として「周辺国」にとどまる道を選んだのである²⁷。専門分野の研究志向的性質との関係に着眼すれば、そこにはさまざまな要因が作用しているので極論はできないが、少なくとも専門職化、専門化の時代にあつて、専門分野の論理を受けとめる高等教育システムの形成のあり方が作用していると同時に、それと関わって大学教授職形成の質的差異が作用しているといえるに違いない。その点、彼我の差異の分岐点は、専門分野の導入を大学のどの部分において行ったかという一つの問題を考へてみる必要があるのではあるまいか。そしてアメリカの大学は、それを①学部、②大学院、③学位、④職階、⑤社会的地位などに制度化することに成功したと考えられるのである。

まず、学部レベルへの制度化は当時、古い伝統的カレッジをハーバードやイェールなどで保持していたにもかかわらず、いち早く変化に対応して新しい学問を大学に吸収することに成功したことに看取できる。これはハーバード・カレッジにおける選択制の導入に端的に現われている。

第二は、大学院レベルへの制度化であり、伝統的な教養教育をリベラル・アーツ・カレッジに残して、科学研究部分の制度化は新設した大学院において行うことに成功した。西欧特にドイツへの遅れは、19世紀中葉までは、ドイツへの留学が不可欠であったという実情に如実に裏書きされている。選択制でカリキュラムに盛り込まれた、専門分野である化学、物理学、現代語、ヨーロッパ史、社会科学などは専門家の養成が欠如しており、ドイツへの留学が余儀なくされた²⁸。この状況を自前で教員を養成する装置を開拓することによって成功裡に改革した意義は大きい。

第三に、学位への制度化。西欧の大学の一般的には博士号だけを基本にするシステムに対して、アメリカでは、この時点に学位の層化を制度化する。学士、修士、博士号である。さらに、後に発達するジュニア・カレッジ、あるいは最近のコミュニティ・カレッジでは、アソシエイトもしくは準学士（associate）学位が授与されている。専門分野との関係が最も顕著に現われているのは、大学院で授与される学位であり、特に専門分野の専攻領域で上級研究を行い、顕著な業績を修めた場合に授与される博士号である。学位ではないが、今日、ポスト・ドクトラル（post doctoral fellowship）は準学位的位置を付与されているのであり、博士号取得後の一定期間いずれかの機関で研修を行なうことによって、専門を深める仕組みになっている。これも専門分野の学位への制度化と考へてさしつかえあるまい。

このようにみれば、専門分野の分化の度合の一番低いアソシエイトからその度合のもっとも高いポスト・ドクトラル段階までの5つの層化がなされていることになる。これは明らかに知識、学問の分業化を反映し、専門分野の増殖機能に対応している。専門分野の発達アルファベット順で言えば、archaeology から始まり、zoology に至るヨコ方向への無数の学問分化を押し進めるとともに、タテ方向へもこの種の学位を多様なものにする力学を持つが、アメリカではこの縦横への分化の動きにいち早く対応することに先鞭をつけたといえる。

第四に、職階への制度化。専門分野の増殖はさまざまな学問を分化する方向へ作用するが、それは大学教授職と結合し、さらに機関と結合するとき、地位のヒエラルヒーを構成する方向へ動く。大学教授職は知識の専門分野にいかにか精通し、いかにか同僚から評価され、いかにか学問的発展に貢献しているか、といった研究の視点を重視するようになり、そのためそれを評価する尺度と職階が結

合する。フェローと呼ばれ、職階があまり明確でない時代は、知識の未分化と専門分野の未発達
の時代に概して該当する。だが、職階はシカゴ大学のハーパー学長が職階制を導入して以来、普及
することになった²⁹。そこには、官僚制の発達を看取できるとともに、従来の大学教育で比重を占めて
いた授業や教育にたいして、研究の比重を高めることを組み込んだ専門分野の論理が作用している
と解されよう。

第五に、社会的地位への制度化。学位や職階などは専門分野が地位のヒエラルヒーと結びつく力
学を潜在的に備えていることを暗示する。後述するように専門分野自体がコード化（codification）
の観点から見た場合、ヒエラルヒーを形成する性質を持つ。したがって、専門分野の内的論理、学
位、職階などが結合することによって、専門分野の社会的地位ができる。具体的には既成学問、学
位、主要大学、学部、職階などと結合した専門分野は高い威信を享受することになり、高い威信は
報賞体系（reward system）と結びつきますます高い威信を獲得し、同時に高い威信は「社会的可
視性」（social visibility）によってさらに高い威信を付与されることになる³⁰。

差異の分岐点は専門分野が大学の中のどの運営単位（operating unit）と結合したかという問題
ともかかわっている。アメリカの運営単位は大陸型の「講座制」ではなく、「学科制」を導入し、
その部分と専門分野が結合したところに特色がある。専門分野が大学の機関の中で中心となる運営
単位のいずれのものと結合するかは重要である。大陸の大学は講座制を伝統的に敷いているため一
つの専門分野と一つの講座が結びつく形態をとる。講座主任がゼミナールや研究所を主宰するが、
講座主任の権限はきわめて強い。その意味で権限は「個人支配型」（personal rulership）であるが、
同時に講座主任は同等の権限で学部の運営に携わるから「同僚支配型」（collegial rulership）の権
限を持つことになる。そこでの研究、教育の組織形態は基本的にギルド徒弟制である³¹。クラークが
大陸型講座の基本様式としていち早く研究を試みたイタリアに典型に見られるように、その構造特
質は閉鎖性である。伝統的学問の維持には長所を発揮するけれども、専門分野が持つ研究を主体と
した異質性を重視する傾向とはあまり馴じまない硬い構造をもっているのもあり、異質な要素を
育てることによって、新しい専門分野の発展を開くには十分ではなく、結果的に学問の発展を阻害
することにもなる³²。この文脈におけば、基本的に大陸型を踏襲した日本とは対照的にアメリカは学
科制を導入し、専門分野の性質に対応した開放的運営組織、指導体制、ピア・レビューなどの慣行
を形成し、結果的に学問の発展を推進することになった。

2) 大学変動の専門分野への影響

専門分野が大学に影響を及ぼす側面とは逆に大学が専門分野へ影響を及ぼす側面をみると、そこ
には①科学政策、②規範の変化、③大学の変化などによる影響が考えられる。まず①社会が政治的、
経済的に一定の制約を与えるならば学問の発展は促進されたり阻害されたりするにちがいない。有
効な科学政策、高等教育政策の確立は、専門分野の分化を促し、競争力をたかめ、学問の水準を上
げることができ、他方その失敗は学問の発展を阻害する。マートン（Robert Merton）の検討した
科学のエトス（ethos of science）の中で、特に「普遍主義」（universalism）と背馳するナチスの
科学政策はドイツの学問の発展に打撃を与えたが³³、同様に大学の場合においても、その科学政策の
あり方はその大学の学問の発展に影響を及ぼさずにおかない。つまりマートン流に言えば、科学の

エトスを大学において確立することは、専門分野の発展を刺激する機能的影響を持つ。

②大学の規範の変化は、さまざまな観点で捉えられる。巨視的变化を見るためトロウ（Martin Trow）のモデルを使えば、エリート型、マス型、ユニバーサル型という変化が区別できる³⁰。科学のエトスが大学に制度化され、科学研究への理解が高まり、専門分化の影響度が増すのは、ほぼマス型段階以降であると考えれば、知識も規範に応じてエリート型、マス型、ユニバーサル型の構造をとることになる。しかし、同じマス型であっても、機関の分化に応じてさらに差異が認められる。アメリカの大学の場合、機関は、研究大学、専門大学、総合大学、リベラル・アーツ・カレッジ、コミュニティ・カレッジなどに分化しているから、それらの制度的期待は異なり、科学のエトスを最も制度的に内面化している「研究大学」（research universities）では専門分野志向と研究への同調の側面は強く、その対極にあるコミュニティ・カレッジでのこの側面は弱い。いわば研究文化と教育文化が存在する。制度的期待の差異は機関に所属し、専門分野を扱う大学教授職における分化を助長することは否めず、大学教授職における研究文化と教育文化の差異化を招来する。

調査によれば、「学問的生産性」（academic productivity）を指標にした機関間の差異は大きく、研究大学では論文、著書などパブリケーション活動が活発であるのにたいして、コミュニティ・カレッジではあまり活発ではない。同じように大学院を卒業して、研究者になる組合員証としてのPh. D.を取得している大学人でも研究大学とコミュニティ・カレッジのいずれに配置されるかによって、専門分野にたいする関与の仕方が変化する。研究大学の教授は研究に勢力を投入しているのにたいして、コミュニティ・カレッジの教授は研究を放棄して教育に生きがいを見いだしていることが報告されている³¹。

研究大学の中でも学問的生産性を指標にして比較するならば、やはり研究志向的機関とそうでない機関の層化が認められる。これは専門分野が機関のヒエラルヒーを形成する方向で作用するとともに、機関が専門分野へのインパクトを持ち、さらに研究志向のエトス、制度的規範、期待、風土、文化を形成し助長するからにはかならない³²。こうして、専門分野、機関、大学教授が三位一体となって独特の学界の構造と風土ができあがるばかりか、この学界は一国の学界の水準を決定し、この学界の水準が国際学界でその国の学界の水準を形成することになる。現在、アメリカの学界は多くの専門分野で世界の学界をリードしているが、それはこの種のメカニズムを各機関においてはたらかせ、研究水準を高めていることを裏書していると考えられる。

③大学の変化にはさまざまな側面が考えられる。大学が大衆化し、学生の要求が多様化して来ると、それに対応する新しい学問領域を設定する必要性が生じてくる。この側面は、上述したようにアメリカの場合は、ハーバード大学において選択性が導入された時に先鞭がつけられた。無数の個々の学生による無数の要求に応えようとすると学生の数だけの個別学問が必要となり、自由選択の論理が働く選択性には、学生の量が増えるほど専門分化を必要とする力学が作用する。他方、大衆化した大学では学生は研究者や学者や専門家にだけなるのではなく、市民やサラリーマンになる層が増大する。エリート時代とは異なって、学生の質の多様化、成長発達の違い、「不本意就学」「一般学生」の増加など、新しい状況が生じるから、この側面から専門分野にたいする抑制的影響が作用する。専門化が進めば進むほど、一般教養や教養教育として種々の学問領域を統合して市民生活や

職業生活の準備を行う大学レベルの基礎教育が不可欠になるのでもある。これら専門分野の分化と抑制の葛藤する時代が到来する。その点、ヨーロッパ大陸の大学がもっぱら専門教育に専念するのは対照的に、アメリカの大学は現代を先取りした形で学部段階にリベラル・アーツ・カレッジを持つことによって、専門分野の分化が進み、専門教育と一般教育の葛藤が増す時代に、学問の統合ないしコア化というインパクトを不断に継続する装置の役割を担っているのである。

④ただ機関からのインパクトによってすべて専門分野がその言いなりになるかといえば、そうではなく、上述したように、専門分野の論理が作用して、独自性を主張することを無視できない。大衆型大学では、ニーズの多様化に伴いすべての専門分野を学生に開放しなければならないという制度的期待が作用するけれども、実際には専門分野によってそれに限度があることは否めない。例えば数学のような学問はそれほど開放的ではなく、初級、中級、上級などの難易度があり、素人を拒む力学が働いている。これに対して、社会科学や人文科学の諸領域の中には、誰でも容易に専攻できうる領域がある。つまり、学問には一種のヒエラルヒーが存在している。大衆化に馴じむ分野と馴じまない分野が分化している。馴じむ分野は開放的性格を持ち、馴じまない分野はエリート的性格を持ち、前者は初学者に教授できるが後者は教授が難しい。このような学問のヒエラルヒーが機関の層化を促進するとともに、他方、学問のヒエラルヒーと機関のヒエラルヒーが結合して、分業化が進み、学部では基礎的コア的領域、大学院では専門的領域、前者では初級的レベル、後者では上級のレベルの知識が扱われるように配慮される。コミュニティ・カレッジのような大衆化の圧力と要請を最も強く受けるところでは、何でもメニューとして存在するかたわら、大学院では専攻がますます厳密になる。

⑤機関から学問への影響の側面で他の重要な要因は、アクセスの統制、つまり入学者の制限である。これは人口要因とかかわり、エリート＝選良といわれるごとく、エリート型は人口比において入学者数を統制する。エリート型とか大衆型などの類型化を規定する要素でもあるこの入学制限は学問にたいして作用し、エリート型時代の学問はエリートの性格を、大衆型時代の学問は大衆的性格を招来する力学を持つ。この文脈から言えば、現代の学問は一般的には大衆化したことになる。しかしながら、すべての学問が同様に開放されたのではなく、社会の要請あるいは市場のニーズを媒介にしながら、その度合は区々である。例えば医学部のごとく志願者が多くアクセスに統制が行われる学問領域は、自ずと制度的期待ひいては学問的威信が高まり、大衆型の大学の時代にあってもエリートの地位を保持する。³⁷

4 専門分野と大学教授職の関係

アメリカの大学に専門分野が制度化され、研究志向のシステム整備が成立する背景を以上にみたが、これは専門分野の研究志向の動因を吸収することに成功したとみなせる。そしてその過程で実際に専門分野という素材と機関という容器を結びつけたのは大学人というヒトである以上、専門分野＝研究を媒介にして大学教授職が成立し、大学教授職は専門分野を基軸にした仕事、すなわち研究および教育、とりわけ研究と結合することになったのである。

1) 専門分野と仕事

専門分野が大学教授職を成立させることは、裏を返せば専門分野が大学教授職における仕事を規定することにほかならない。そこで専門分野の特性をもう少し細かく観察すれば、アメリカの大学と大学教授職がその性質にいかん適切に対応したかという事実を裏付けることができるとともに、仕事と大学教授職のさまざまな世界を見ることができる。

まず、専門分野はアカデミック・ワーク (academic work) つまり大学の仕事=学事を規定する、ということができ³⁸る。知識の生産、伝達、消費の中で主として、生産と伝達を行う大学では、このような知識の属性を備え、科学知識を素材として組成されている専門分野が生産され、伝達されるのであるが、それは研究と教育という大学の重要な社会的機能である仕事にほかならない。

専門分野は分化する。そのため、それに呼応して仕事の内容は差異化する。専門分野の分化の度合を、例えば1984年のカーネギー調査に基づいた集計によって分類すると、専門分野 (及び専門職的領域) と教授団の関係が分かる。これによると、①物理科学 (数学及び統計学、化学、物理学、地球科学など)、②生物科学 (生物学、生物学及び解剖学、細菌学・分子ウイルス学・微生物学、生化学、動物学、植物学など)、③社会科学 (心理学、社会学、経済学、政治学、人類学及び考古学、地理学など)、④人文科学 (英語及び英文学、外国語及び外国文学、歴史学、哲学など)、⑤「ハード」専門職 (工学及び工業技術、農業及び林業、医学、歯学、その他保健領域、建築及びデザインなど)、⑥「ソフト」専門職 (教育、ビジネス・商業・マネジメント・芸術、身体・健康教育、ホームエコノミクス、法律、ジャーナリズム、ソーシャルワーク、宗教及び神学、図書館科学など) の6つのクラスターに類型化されている。各クラスターの比率は、13, 7, 13, 17, 20, 30の各%となる。「ソフト」専門職が一番比率が多く、生物科学の比率が一番少ない構成になっている。³⁹

これら専門分野は学問的性格にしたがって、仕事の種類と内容が規定されることになるが、同じ研究といえど研究の方法、内容組織などはけっして同一ではなく、同様に教育の仕方も専門分野によって異なる。数学の研究と英語の研究は異なるし、教え方も異なり、物理学と社会学もそうである。そこにはさまざまな研究と教育のスタイルが存在する。実際には、各専門分野ごとの教授団が成立し、仕事が行われる仕組みになることから、研究と教育のスタイルは教授団ごとに随分異なることを意味する。このように考えれば、大学教授職の世界は一つでなく、そもそも単数の「学者共同体」(a single "community of scholars") というものは成立しないことが歴然として来る。⁴⁰ 大学人は単数の専門職に所属するのではなく、専門分野の規定する多種多様な仕事に準拠する専門職集団に所属していることが分かる。

2) 専門分野の文化とアカデミック・ライフ

この大学教授職は単数でないという論調は、専門分野の性質を研究する視点を踏まえる時、必然的に得られる結果である。例えばビグラン (Anthony Biglan)、ライト (Donald Light)、コルブ (David A. Kolb)、ベッカーなどの文献からそうした論調の帰結をみる⁴¹ことができる。かくして、大学教授職といっても一様ではなく、個々の専門分野とそれの集合体であるグループによって異なる世界が現出することになる。

まず①小さな専門分野グループ（講座，学科，研究所レベル）でみると，数学の教授と物理学の教授と，英語の教授はそれぞれ専門分野を専攻しているため，その仕事の性格は内容的に変化する。専門分野は主要な仕事の中で，研究と教育の比重を異なるものにし，時間配分，内容，教育のスタイル，研究のスタイルを規定する。例えば理科系では実験中心であり，実験室型研究がおこなわれ，機械装置が必要であり，徒弟制度，協同研究が顕著にみられるだろうし，文科系，特に人文科学では，書齋，個人研究がみられるだろう。理科系は研究時間が多く，社会サービスに振り向ける時間は少ないだろう。⁴⁰

これらのことは，数学の文化，物理学の文化とか，文科系の文化，理科系の文化など専門分野による文化が成立することを意味する。クラークは数学の文化を次のように述べている。

「数学の文化は数値の上で明確な観念群の持つ内的論理と一貫性を強調する。基本的なスタイルは優雅さと正確さを結合させる。これはクラシック音楽においても見いだせる結合様式である。数学の好きなものは，バッハやモーツァルトが好きである——という数学—音楽症候群は広く認められている。彼らが扱う素材は数学者をして，大部分のその他の専門分野，とりわけ社会科学と人文科学の質的な専門分野にみられるものとは，ひどく異なった思想やコミュニケーションのスタイルへとおもむかしめる。文書によるコミュニケーションは短く，数学的シンボルによって表現された，高度に濃縮された知識が恐らく数ページほどあるだけにすぎない。これとは対照的に歴史家は3ページでは始動できない。別の人々は机，部屋，書物の充満した図書室を必要とするだろうが，創造的な数学者は時間を決めて，コーヒーを飲みながら壁かバイオリンをじっと見つめることを必要とするか，さもないければ黒板にチョークと黒板ふきをもって立ち向かうことを必要とする。彼は自分のキャリアの初期から，物理学とか化学のような境界領域の学者達を含めて，他の学者達とは異なっているのだという深い感覚能力を持ちやすい。⁴¹」

ビグランは，ハード・ソフト（hard-soft）軸，非生命・生命システム（nonlife-life system）軸，純粋・応用（pure-applied）軸の3次元から8つの専門分野（academic task areas）群を分類している。それによれば，例えば「ハード・非生命・純粋」型には天文学，化学，地理学，数学，物理学，「ソフト・純粋・生命」型には人類学，政治科学，心理学，社会学などが属するとしている。⁴²

ベッカーはビグランより簡素化して，知識の性質と専門分野の類型との関係を論じている。つまり，ハード—ソフト軸と純粋—応用軸とを交差させて出来る四つの専門分野を類型化させる。①「ハード・純粋」型は純粋科学（例えば物理学，生物学，植物学，動物学）であり，知識の性質は，累積的，原子的（水晶状かつ樹木状）であり，普遍性，量，単純化などに関心を持ち，発見と説明へと帰結する。②「ソフト・純粋」型は人文科学（例えば歴史学）と純粋社会科学（例えば人類学）であり，知識の性質は畳成語（reiterative）的かつ全体論的（有機的かつ川状）であり，特殊性，質，複雑性などに関心を持ち，理解と解釈へと帰結する。③「ハード・応用」型は工学（例えば機械工学）であり，知識の性質は合目的的で，プラグマチック（ハードな知識によるノウハウ）であり，物理的環境に関心を持ち，生産物，技術へと帰結する。④「ソフト・応用」型は応用社会科学（例えば教育学）であり，機能的，功利的（ソフトな知識によるノウハウ）であり，準専門職

的实践に関心を持ち、観察記録や手続きへと帰結する。

これら専門分野の文化の性質は、①が競争的群居的なタイプであり、政治的組織性が高く、学問的生産性も高く、仕事志向であり、②が個人主義的兼職者のタイプであり、構造化が曖昧で、学問的生産性が低く、個人志向であり、さらに③が企業家的コスモポリタンのタイプであり、「特許」が学問的生産性に代替可能であり、役割志向であり、さらにまた④は外見志向のタイプであり、地位が不確実で、知的ファッションが支配し、学問的生産性がコンサルタント活動によって抑制され、権力志向である、という特徴がそれぞれ描かれている。⁴⁵⁾

ベッカーは各専門分野は大学教授職の生活を、①キャリアの開始 (initiation)、②社会的相互作用のパターン、③専攻、④他専門分野への移動性、などにおいて規定することを論述している。例えば、①のキャリアの開始を事例とすれば、「ハード・純粋」領域の院生は専攻学科を選択し、研究の指導教授を選ぶが、この後、共同研究と同調を必要とする事業組織体の被雇用者になり、事業組織体の要求にしたがい、指導教授によって分担の研究テーマが与えられる。特に実験系では指導教授の学生との接触は緊密である。研究に成功を修めた院生は研究結果を指導教授と他の研究分担者との連名で公表することが求められるのがふつうである。これにたいして、「ソフト・純粋」領域の院生は、学科や指導教授だけでなく研究テーマも選べる。被雇用者どころか、自営業者のように扱われる。時間も自由に使える。指導教授に束縛されることもない。論文を発表したいときには自分の名前で自由に発表できる。ほぼこのような相違が生じるのは何故かといえば、ベッカーは知識の文脈の相違によるのだ、と指摘している。

「もしその者が問題が容易に分割できる領域にいるならば、共同研究を行い、緊密に編成された各メンバーが明確な下位的問題に取り組み、全体の問題を解決するのに寄せ集められるのは当を得ている。そして仕事の中で手ごろなものを新参者があてがわれるのは当然なことである。チームによる仕事は、集団の規範への同調を意味し、チームリーダーに従うことなのである。これに対して、知識が全体論的であり、問題が確定されにくく、分割できにくい「ソフト・純粋」領域では、共同研究への誘因は乏しい。解釈は実質上、個人的活動であり、各学者は事実を自分で再評価しなければならない。したがって、博士課程の学生が気ままに研究するように求められるのは驚くに足らない。つまり、彼らが所属する明確に規定された集団はなく、研究指導教授は勉強の指揮者の役割よりも批判的助言者の役割を担っている。⁴⁶⁾」

このように、専門分野によってアカデミック・ライフは多様な世界を形づくる。大学の運営単位のいわば原子的部分にみられる、こうした多様性は、そのまま大学教授職の世界を表わしている。したがって、学部ユニットのごとくグループの規模が大きくなっても基本的には専門分野の論理が働く。

②学部ユニットのごときかなり大きなグループには一つは学部と学部のレベル、他の一つは学部と大学院のレベルという二つのレベルがある。第一に学部レベルは学問のヨコへの分化と対応している。例えば日本の場合では文学部、教育学部、理学部、医学部など。アメリカの場合はこの部分は、リベラル・アーツ・カレッジになるから、実質的には上述の学科とその教授団が代替していることになる。第二に学部と大学院レベルは、アンダーグラデュエイトとグラデュエイトである。ア

アメリカの場合、アンダーグラデュエイト部分のリベラル・アーツ・カレッジとグラデュエイト部分のグラデュエイト・スクールとプロフェッショナル・スクールでは仕事の性格が異なる。前者が教育中心、後者が研究中心。前者が、教養教育、一般教育をめざし総合的（comprehensive）であるのに対して、後者が専門教育をめざし専門的な性格を持つ。グラデュエイト部分の文理学部大学院にあたるグラデュエイト・スクールは学者養成教育、これに対して医、法、教育、などのプロフェッショナル・スクールは専門職教育に力点を置く。どちらに主要に配置されているかが教授団の仕事の性格を規定することになる。

アメリカの場合、すでに論じたように専門分野の分化と研究志向の性質から生じる大学の仕事の分化を制度的に有機的に位置づけている。すでに知識とアメリカの大学の社会的機能との関係を体系的に研究して構造を提示した、パーソンズ（Talcott Parsons）のマクロな構図を使えば、アンダーグラデュエイトでは市民教育、グラデュエイトでは専門職教育と研究が重要であるが⁴⁷、実際にはいま述べたような有機的関係を示しているといえよう。

3) 専門分野の成層

専門分野は専門的知識を媒介にそれを専攻する専門家を擁して成立していることはすでに見た通りである。知識自体にはコード化による内的序列があるとしても、本質的には権威を志向したり、権力を持ったり、あるいは役にたったり無用であったりするのではなく、それを社会的に活用する仕方によってさまざまな色合いが生じ、そこにヒエラルヒーが成立する。

①学問のコード化によるヒエラルヒー

客観性、普遍性、独創性を要請する科学の論理の要請に耐えた知識は学問のコード化を高める。コント（Auguste Comte）は学問の発展段階を論じて、数学、天文学、物理学、化学、生物学の順序に並べている⁴⁸。これら自然科学は抽象性と一般性が次第に減じて行く順序に並べられており、これらに対して社会学は具体的、特殊である。そのため精密性に達するには数学が容易で、社会学は困難な学問であるとされる。マートンは物理学を対象にして、この種のコードを吟味し、客観性の高い学問であることを検証している⁴⁹。このような側面を注目するとき、学問の数だけ威信序列が成り立ち、無数の知識は、名も無き一般的知識と専門分野として確立された科学知識とその間にあって専門分野をめざしているマージナルな知識と多様であることになる。そして専門分野として制度化された科学知識もさらにより威信のある学問になるべく競争を展開している。

「……基本的アプローチ、理論、方法に基づいて、自らの領域の中で不統一が生じると、社会学者達と人文科学者達は、外部から自己の仕事に持ち込まれた特定の政治的見解ないし世界観に害され易くなる。この意味では、社会学、政治科学、歴史学はかなり開放的であり、これと対照的に数学、物理学、化学はより閉鎖的文化体系のごとく作動している。体系的知識によってもたらされる自律性は素材の側面とともにシンボルの側面に沿って強まる。」⁵⁰

こうした背景の中で、抽象性、一般性、純粋性、パラダイム性の高い数学や物理学を頂点にして、自然科学群がまず上位に位置し、その次に社会科学群、さらにその次に人文科学群が続く体系が概ね成立している。ピグランやベッカーの理論にも見られるように、学問には理論的かつ純粋な部分と実践的かつ応用的かつ非純粋な部分とがあるから、これを加味すると、同じ数学でも純粋

数学と応用数学が区別できる。したがって、数学、応用数学、物理学、化学、生物学などのヒエラルヒーができる。

専門分野の序列（pecking order）は国や機関の事情を反映するから単純には決まらない側面も多々あり、実際には、このように単純な構造を描けるのではないかもしれない。学問の論理自体ではそういっても現実には、例えば伝統的学部の構図に入れて考えると、別の構造がみえてくるかもしれない。フランスの事例をみると、ブルデュー（Pierre Bourdieu）が考察しているように、自然科学と人文社会科学のなかでも、理論性と純粋性の高い学問は威信が高い。自然科学ではほぼ上述のような構造となるが人文社会科学では、フランス語、哲学、古典学、言語学、歴史学といった威信体系をとり、自然科学と人文社会科学の交差する領域で、最後に登場してきた、経済学、社会学、心理学、言語学、地理学、地質学など社会科学部分は威信が低い構造になっている。⁵¹

そのような国家システム間の専門分野的文化的の違いがあると考えられるけれども、序列があることは首肯できる。ベッカーは大学、全国、国際の各レベルにおいて、物理学が巨大科学として豊かな資源を獲得しますます高い政治的地位と威信を享受する専門分野になっていることを述べている。⁵² しかも、同じ物理学でも理論家と実験者では別の世界を形成していることも指摘している。⁵³

②専門分野のドリフト

このような威信構造の中で言えるのは、概して専門的威信の高い知識や学問は科学の論理を組み込み、研究志向であることがその特徴である。そして、専門分野と専門職がむすびつく時、威信の高い学問群は威信の高い専門職を構成しているが、これを大学教授職という専門職の場合に当てはめれば、威信の高い学問群の専攻者はより研究志向になっていることが理解できるのである。かくして、専門分野は威信格差をもち、より高い威信を求めて漂流する。クラークはアカデミック・ドリフト（academic drift）を論じるとともに専門分野のドリフトを論じている。⁵⁴ アカデミック・ドリフトは「大学やカレッジが最も威信の高い形態に向って指図されることなく模倣しながら集中し行く」ことであり、「模倣は彼らの意味をわれわれの意味に採用し、彼らの実践をわれわれの実践に採用し、したがって、価値を中核からさまざまな周辺へと拡散させる」ことである。専門分野の場合は、上述のヒエラルヒーの上位にある核的な威信と勢力を持つ専門分野から下位部分にある上昇志向の専門分野部分への模倣がなされドリフトが進行する。核的専門分野は物理学であり、化学であり、そこからさらに政治科学や社会学へと模倣がなされるが、その際、政治科学や社会学は、物理学や化学に組み入れられた数学や統計学を模倣した経済学や心理学を模倣し組み入れて地位の上昇をはかるのである。こうして、専門分野間には模倣を通して相互作用が成立し、学問のネットワークが張りめぐらされる。知識の性格を反映して、学問は無限に細分化、専門化、断片化して行き、相互間に繋がりが失われて行く一方で、こうした連携と再構成がなされて行く。

③機関と結合したヒエラルヒー

専門分野単独にコード化における精密性、客観性によって威信体系が成立するばかりでなく、現実にはさまざまな外的要因と結合した威信体系が成立する。つまり専門分野の論理が社会的威信を形成すると同時に、社会的威信が専門分野の威信を形成する部分が存在する。社会的威信が国家レベルで付与される場合はその一例であり、例えば、明治維新の学問は最初工学部が重視され、やが

て法学部が重視されるようになった経緯があるが⁵⁹、この場合学問自体の威信体系ではなく明らかに国家政府の威信を踏まえたお墨付きの付与による威信である。天野郁夫が考察した「高等教育の日本の構造」の硬直性は⁵⁹、まさしくこの種のヒエラルヒーの硬直性であるといえよう。

このような社会的威信の付与は広義の報賞体系に位置づき、各種報賞が付与されれば、学問の社会的威信は自ずから高くなる。例えば、国内の文化勲章、恩賜賞、学士院賞などの受賞対象になった学問領域は威信を高め、世界的には、ノーベル賞、フィールズ賞、エリオット賞などの国際学術賞は知名度が高いために、その受賞対象学問領域は威信を高める。また、各種のエポニミーやエポニムを多数輩出している学問領域は同様にして、威信が高い。逆にいえば、これら報賞の対象になる学問領域はすでにコード化が高く、学問体系が確立され、独創性を承認する基準が明確であることを裏書しているのでもある。つまり、学問の威信秩序の頂点部分に存在する学問だけがこの種の榮譽を享受して、ますます知名度と威信を高めるというマタイ効果の力学が働くのでもある。

4) アカデミック・ドリフト

大学教授職がかかわるのは専門分野と機関であるが、上述の文脈からも言えるように、専門分野の威信が機関の威信を左右すると同時に機関の威信が専門分野の威信を左右する。前者の場合、数学や物理学や医学のない機関はそれらを持つ機関に比べて低い威信しか付与されないから、できるだけそれらを機関に組み入れようとする。特に医学部は、医学という単独の専門分野から成り立つのではなく複数の専門分野から成り立つけれども、中世大学からの伝統をもち、現代において威信の高い学部になっているから、これを持つ機関の威信は高くなる。後者のばあい、すでにヒエラルヒーの頂点に存在する機関に組み込まれた学部や学科は知名度と威信を高める。アメリカの威信の高い機関は、各種調査に見られるように、教育、研究、学生の就職、難易度、教授の質、俸給、学問的環境などが優れているとされるが⁵⁹、そうした条件を持つ機関に組み込まれた専門分野はそういう優れた条件を持たない機関に組み込まれたものよりも知名度や威信を高める。

もちろん、専門分野と機関が結びついたからといって、自動的に威信が規定されるのではなく、現実には、大学教授職を媒介にして威信は決定されることになる。「名目賃金」と「実質賃金」があるように、額面と実質が同等であるとは必ずしも言えないことを考えれば、大学の場合にも名目的な威信と実質的な威信という表現を使い、威信の高い学問と威信の高い大学とが一緒になった場合、確かに名目的威信が高いとしても、実質を伴っているかどうか分からないことを考えてみる必要がある。その両者の関係が不断に検討されるならば、恐らく威信は一定ではなく変動するにちがいない。なぜならば、現実の威信は素材である専門分野や容器である機関によって機械的に決まるのではなく、それを決めるのはあくまで両者を媒介する大学教授職であり、個々の大学人であるからであり、彼らによる卓越した教育と研究活動が行われるとき、実質的威信は高いはずであるからである。そのような実質的威信を重視する限り、不断の評価に基づく威信の新陳代謝を起こさせる装置を持たなければならず、その点でアメリカの高等教育システムは常に各種ランキングの公表がなされ、アクレディテーションがなされ、ピア・レビューがなされることによって、その種の装置を作用させている。そこでのアカデミック・ドリフトつまり「大学の漂流」は専門分野、機関、大学教授職の三位一体の関係によって形成される構造を持っていることが分かる。高等教育のアメリカ

カ的構造の特質がそこにできあがるといわなければならない。

5 結 論

小論においては、第一に大学教授職の国際比較研究の枠組みを考える視座から、専門分野の視点に注目した。大学教授職の定義と内容の曖昧性をできるだけ解消するには、抽象的な大学教授職像を追求するのではなく、専門分野と大学教授職の関係を直視することによって、個々の大学教授職の実態を明らかにしていく作業が必要なことを指摘し、その立場から若干の考察を行った。

第二にアメリカの大学と大学教授職が世界の「学問の中心地」を形成していることから、一つのモデルとして研究するに値することを指摘し、専門分野＝研究の観点に即して、その制度的特質と大学教授職の特質の形成過程と構造を考察した。

第三にアメリカの専門分野の制度化と研究志向のシステムの整備の動向と特徴は、専門分野の性質に沿って縦横への分化と層化を有機的に形成したことにあると捉えた。これは専門分野が内的論理として持っている分化志向と研究志向を制度化することに成功したとみることができる。

第四にアメリカの大学教授職が成立する過程で専門分野の論理を組み込むことによって、研究志向を強めたことをみたが、そこでは専門分野におけるヒエラルヒー形成とアカデミック・ドリフト形成の力学を専門分野を制度的に内面化することで専門職化を達成した大学教授職の場合も強く保持していることを読み取れる、といえる。そしてヒエラルヒーの形成は専門分野の論理からみて回避できない以上、それを閉じられた構造に封じ込め、地位の固定化を追求するのではなく、不断に地位の新陳代謝を起こすように柔軟に作動させるシステムの装置が必要であり、アメリカのシステムはそのことによりかなり成功をおさめていることを論じた。こうしてアカデミック・ドリフトがシステムの的に保証される装置の確立は、研究や学問や科学の発展に貢献するとともに、専門職としての大学教授職の発展にも寄与することを論じた。

もちろん、以上は大学教授職の国際比較研究を手掛ける場合の枠組みと視点における一つの試論の域を出ない。専門分野＝研究の視点のみの追究は、教育の側面を等閑に付し、またアメリカの大学システムや大学教授職の研究を中心とした特質をその長所のみ限定して考察するあまり、わずか1/5の「研究大学」機関がヒエラルヒーの頂点に君臨し研究文化を形成、支配している事実、マタイ効果が存在する事実などを十分に考察していないという批判を招くだろう。それらは筆者の他の文献でも扱っている主題でもあり、それらと統合した観点からの考察がさらに必要である。さらに小論で採用した枠組みと専門分野の視点を国際比較に援用する作業を行うとき、ここでひとまず得られた結論も、①日本を含めた諸外国との比較、②専門分野の内的論理に関するさらなる検討、③各専門分野の領域に即した検証、④大学の仕事の他の部分である、教育や管理運営などとの関係の吟味、⑤大学教授職に関する研究以外の他の専門職の研究との関係などにおいて追求することを必要としているだろう。

註

1) 例えば、次の文献参照。有本章『大学人の社会学』学文社、1981年。同「日本の学界の国際評

- 価と特質」『大阪教育大学紀要第Ⅳ部門』第32巻第1号, 1983年。同編「アカデミック・プロダクティビティの条件に関する国際比較研究」『大学研究ノート』第66号, 1986年。
- 2) 次の文献では定義の試みがある。新堀通也「アカデミック・プロフェッションの社会学」新堀通也編著『大学教授職の総合的研究』多賀出版, 1984年。天野郁夫「教師と研究者—過去と現在」喜多村和之編『大学教育とは何か』玉川大学出版部, 1988年。山野井敦徳「大学教授の研究構想」新堀通也編『現代学校教育の研究』ぎょうせい, 1985年。有本章「ホモ・アカデミクスの概念—academic profession との関連性」『教育学論集』第8集, 大阪教育大学教育学教室, 1979年。同『マートン科学社会学の研究—そのパラダイムの形成と展開』福村出版, 1987年。
- 3) 原語の意味をできるだけ正確に伝達するには, カタカナ表記でアカデミック・プロフェッションと邦訳するのが大学教授職よりも適切かもしれない。なぜならば, アメリカでは大学教授だけではなく, 管理者にもこの言葉が適用され広く使用されていると思われるからである。academic という原語の「大学」とか「学問」という意味合いと profession という原語の「専門職」という意味合いが合成されて出来ている言葉であるが, 専門職は一応日本語としても定着しているにしても, アカデミックという言葉は日本語に置き換えるのが難しく, 必ずしも定訳ができないまま今日に至っていると考えられる。「大学専門職」「学問的専門職」「学術的専門職」などが一応の訳語として考えられるのであり, 内容的にみた場合, 上述のように必ずしも大学教授のみをそのカテゴリーに含まないとすれば, むしろ漢字表記では「大学教授職」よりも「大学専門職」の方が原義に近いという観察もできる。そのような問題があるけれども, 小論ではカタカナと漢字表記をほぼ同義として扱うことにしたい。
- 4) Burton R. Clark, ed., *The Academic Profession: National, Disciplinary, & Institutional Settings*. University of California Press, 1987, p. 2.
- 5) A. H. Halsey and Martin Trow, *The British Academics*. London: Faber, 1971.
- 6) Burton R. Clark, *The Academic Life: Small Worlds, Different Worlds*. The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1987, p. xxi.
- 7) Burton R. Clark, ed., *The Academic Profession*. op. cit., p. 1.
- 8) Harold Perkin, *Key Profession*. London: Routledge, 1968.
- 9) Talcott Parsons and Gerald M. Platt, *The American University*. Cambridge, Mass.: Harvard University, 1973.
- 10) Burton R. Clark, ed., *The Academic Profession*, op. cit., にこの観点が強く現われている。しかしこれは, クラーク独特の観点ではなく, (註11)に掲載しているオルソン＝ヴォスの文献の基本的観点でもある。
- 11) Alexandra Oleson and John Voss, *The Organization of Knowledge in Modern America, 1860-1920*. The Johns Hopkins University Press, 1979, p. vii
- 12) Cf. Burton R. Clark, *The Academic Life*, op. cit.
- 13) 次の文献参照。Laurence R. Veysey, *The Emergence of the American University*. Chicago: University of Chicago Press, 1965. Alexandra Oleson and John Voss, *The Organization of Knowledge in Mo-*

- dem America, 1860-1920*, op. cit.
- 14) Diana Crane, *Invisible Colleges*. Chicago: University of Chicago Press, 1972.
 - 15) Robert K. Merton, *The Sociology of Science*. Chicago: University of Chicago Press, 1973.
 - 16) Cf. J. Cole and S. Cole, *Social Stratification in Science*. Chicago: University of Chicago Press, 1973. 慶伊富長編『大学評価の研究』東京大学出版会, 1984年。
 - 17) 各種研究で証明されている。例えば、ベンデービッド (天城勲訳)『学問の府』サイマル出版会, 1982年。新堀通也編『学問の社会学』有信堂, 1984年。同編著『学者の世界』福村出版, 1981年。同編『学問業績の評価』玉川大学出版部, 1985年。有本章編「アカデミック・プロダクティビティの条件に関する国際比較研究」前掲。
 - 18) Tony Becher, "Disciplinary Shaping of the Profession", Burton R. Clark, ed., *The Academic Profession*, op.cit., p. 271.
 - 19) Burton R. Clark, *The Higher Education System: Academic Organization in Cross-National Perspective*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1983, p. 9.
 - 20) *Ibid.*, p. 13.
 - 21) *Ibid.*, pp. 13-17.
 - 22) Donald Light, Jr., "The Structure of the Academic Professions." *Sociology of Education* 47, 1974, pp. 2-28.
 - 23) ベンデービッド『学問の府』前掲。
 - 24) Alexandra Oleson and John Voss, *The Organization of Knowledge in Modern America, 1860-1920*, op. cit., p. viii-ix
 - 25) *Ibid.*, p. xi.
 - 26) 中山茂「日本の大学の西洋・官僚制・企業モデル」『大学史研究』第4号, 1988年, 1-6頁。同『帝国大学の誕生』中央公論社, 1978年。
 - 27) ベンデービッド『学問の府』前掲。
 - 28) Alexandra Oleson and John Voss, *The Organization of Knowledge in Modern America, 1860-1920*, op. cit., p. xi p. xx, Notes 12.
 - 29) F. Rudolph, *The American College and Universities*. Alfred A. Knopf, 1962, p. 398.
 - 30) 報賞体系については、有本章「科学の報賞体系論」『マートン科学社会学の研究』前掲, 第8章参照。
 - 31) Burton R. Clark, *The Higher Education System*, op. cit., pp. 110-116.
 - 32) Burton R. Clark, *Academic Power in Italy: Bureaucracy and Oligarchy in a National University System*. Chicago and London: Chicago University Press, 1977.
 - 33) Robert K. Merton, *The Sociology of Science*, op. cit., pp. 257-258.
 - 34) M. トロウ (天野・喜多村訳)『高学歴社会の大学』東京大学出版会, 1976年。
 - 35) Martin J. Finkelstein, *The Academic Profession: A Synthesis of Social Scientific Inquiry since World II*. Ohio State University Press: Columbus, 1984, pp. 96-105. Burton R. Clark, *The Academic Life*,

op. cit., pp. 82-89, p. 227.

- 36) 有本章・奥川義尚・大膳司「主要機関の学問的生産性に関する国際比較研究—アメリカの主要大学の学問的生産性とその条件」(日本教育社会学会発表, 1988年)においてこの観点からの考察を行っている。
- 37) Barbara B. Burn, ed., *Admission to Medical Education in Ten Countries*. International Council for Educational Development, 1978.
- 38) Burton R. Clark, *The Academic Life*, op. cit., p.89.
- 39) *Ibid.*, p. 39.
- 40) Cf. Burton R. Clark, *The Higher Education System*, op. cit., p. 91.
- 41) Anthony Biglan, "The Characteristics of Subject Matter in Different Academic Areas." *Journal of Applied Psychology* 57 : 195-203, 1973. Donald Light, Jr., "The Structure of the Academic Professions." *op.cit.* David A. Kolb, "Learning Styles and Disciplinary Differences." In Arthur W. Chickering, ed., *The Modern American College*. San Fransisco: Jossey- Bass, 1981. Tony Becher, "Towards a Definition of Disciplinary Cultures." *Studies in Higher Education* 6, no. 2, 1981, pp. 109-122. Tony Becher, "The Disciplinary Shaping of the Profession." *op.cit.* Tony Becher, "The Cultural View." In B. R. Clark, ed., *Perspectives on Higher Education: Eight Disciplinary and Comparative Views*. Berkeley: University of California Press, 1984, pp.165-198.
- 42) 例えば, 有本他調査(註36)において同様の結果を得ている。
- 43) Burton R. Clark, *The Higher Education System*, op. cit., p. 77.
- 44) Anthony Biglan, "The Characteristics of Subject Matter in Different Academic Areas." *op. cit.*
- 45) Tony Becher, "The Disciplinary Shaping of the Profession", *op. cit.*, p. 278.
- 46) *Ibid.*, p. 283.
- 47) Cf. Talcott Parsons and Gerald M. Platt. *The American Univerisity*, op. cit.
- 48) コント「実証精神論」『世界の名著』36, 中央公論社, 1970年, 140—233頁。
- 49) Robert K. Merton, *The Sociology of Science*, op. cit., pp. 460-496.
- 50) Burton R. Clark, *The Higher Education System*, op. cit., pp. 80- 81.
- 51) Pierre Bourdieu, *Homo Academicus*. Cambridge: Polity Press, 1988, p. 122.
- 52) Tony Becher, "The Disciplinary Shaping of the Profession", *op. cit.*, p. 288.
- 53) Tony Becher, "Towards a Definition of Disciplinary Cultures" *op. cit.*, p. 116.
- 54) Burton R. Clark, *The Academic Life*, op. cit., p. 143.
- 55) 中山茂『帝国大学の誕生』前掲, 参照。
- 56) 天野郁夫『高等教育の日本的構造』玉川大学出版部, 1986年。
- 57) Cf. David S. Webster, *Academic Quality Rankings of American Colleges and Universities*. Springfield, Illinois; Charles C Thomas Publishers, 1986. L. V. Jones, G. Lindzey & P. E. Coggeshall, eds., *An Assessment of Research- Doctorate Programs in the United States*. National Academy Press, 1982.

〔付記〕

小論は、昭和62年度文部省科学研究費補助金（一般研究C，代表者・有本章）「主要研究機関における学問的生産性の条件に関する国際比較研究」の研究成果の一部である。

A Comparative Study on the Academic Profession
— With focus on the concept of academic discipline —

Akira ARIMOTO*

This paper consists of four parts which discuss: (1) ambiguity of the characteristics of the academic profession; (2) formation of the framework and perspective of comparative study on the academic profession; (3) the viewpoint of academic discipline; (4) the relationship between the discipline and the academic profession.

Based on the discussions in part(1) and (2), the remainder of the paper deals with the nature and logic of the academic discipline, with reference to Burton R. Clark, to make a comparative study on the academic profession.

From this viewpoint some observations have been made in part (3) on the problem of the relationship between the discipline and the academic profession in the U. S. A. (as one of the model cases of this kind of framework) by discussing two topics: institutionalization of disciplines into colleges and universities; the effects of the changes of colleges and universities upon disciplines. By these discussions the author argues that in the U. S. A. success has been made in introducing disciplines into colleges and universities so as to promote research activity by using the nature and logic of discipline; specialization, differentiation, and stratification. For example, the introduction of: the elective principle at the undergraduate level, more specialization and several advanced academic degrees at the graduate level, and also the department system and academic ranks and reward system into operating units, etc.

Part (4) focuses on the nature and structure of disciplines that define the content of academic work and academic life. As pointed out by Anthony Biglan, Donald Light, David A. Kolb and Tony Becher, social stratification occurs with natural sciences assuming higher status and social sciences and humanities lower status. Competition and drift occurs among them when lower ones try to gain higher positions. Accordingly academic drift also occurs based on this logic.

In the concluding remarks the author says that compared to Japanese higher education system and academic profession, its American counterparts have succeeded in causing academic drift responding to the disciplinary drift and as a result they can contribute more to promote research and scientific development.

* Professor, R. I. H. E., Hiroshima University